

清月

9月中の出句 17名 延べ626句



第170号 平成26年 9月

俳句と川柳の違いを考える

ゆたか

私は、若き日のあるとき、川柳の会で「最上はわが家わが部屋寝正月」と詠み、高評価を受け、後日、この川柳をメンバーを異にする俳句の会に出したところ、俳句としても高評価を受けました。

この時以来、川柳と俳句の違いを定義づけて、その境界を明確にして線引きをしようとしたが未だに線引きまでには至っていません。

俳句と川柳は共に貴族文芸の「連歌」の発句から庶民が作り出した五・七・五音の短詩文芸ですが、両者の違いはあいまいで明確な線引きが出来ません。

強いて違いを比較すると次のようなことでしょうか。

- 一 俳句は「物」を詠み、川柳は「人」を詠む。
 - 二 俳句は、「①文語表記で、②季語を入れ、③切れ字によって」強く言い切り読者に余韻が伝わるように詠むもの、川柳は、「①口語表記で、②穿ち（うがち）、③おかしみ、④軽み」によって日常的な関わりからくる滑稽さが読者に伝わるように詠むもの。
 - 俳句は余韻を残すが、川柳は気持ちにストレートに表現するもの。
 - 俳句は書き言葉の文語体だが、川柳は話し言葉の口語体である。
 - 切れ字は文語体にあるが、口語体にはない。
 - 俳句は自然や四季を題材にし、川柳は人間模様や社会風刺を題材にする。
- 以上

目次

近詠	ゆたか	2
雑詠選	ゆたか	3
寸感	ゆたか	9
互選集計結果報告	事務局	10
互選一〇句の披講	幹夫 恵山 宏一 しゆじ	11
	よし子 美琴 允孝 睦夫	12
	省司 順一	13

近詠

野田ゆたか

一湾の闇を深めて野分濤
土石流ありしは昔ほたる草
吹く風に飄々とじやれ猫じやらし
勅祭の格式今も放生会
そこだけに風の生まれて萩の庭

雑詠

ゆたか選

(大字は秀句)

高原を天へ繋げて蕎麦の花 千葉 清水恵山
サロベツの花野の果てや利尻富士 同
蹲に手水の音や貴船菊 同
闇深し庭の片隅蚯蚓鳴く 同
恙なく万物実り厄日去る 同
照り翳る陣屋の白洲桐一葉 岐阜 石崎そうびん
火口湖のかぎりなき蒼天高し 同
籠堂に紛れこみたり秋の蝶 同
縁側に並びて座る良夜かな 同
みはるかす浅間の煙吾亦紅 同

男郎花流るる風に逆らはず 大阪 橋本幹夫
石狩に青き空あり鮭遡る 同
邯鄲の声の中ゆく夜汽車かな 同
竹の実を噛んで演習場の夜 同
首根つこ抓めば軽きいぼむしり 同
金木犀路地いつせいに匂ひ初む 吹田 池下よし子
拓本の歌碑打つたんぽ秋うらら 同
潮風に鳥渡り来る船泊り 同
地車の漢いなせなやり廻し 同
咲き満ちて萩の乱るる昨夜の雨 同
学ぶこと道のり遠き秋灯下 三重 後藤允孝

稲架かけて畝傍の里の夕間暮 三重 後藤允孝
 木犀の匂へる路に順路なき 同
 秋の声きく近江路の遠汽笛 同
 この先はけもの道なり男郎花 同
この石も先祖の一人秋彼岸 鳥取 瀬尾睦夫
 指さしてあれも木槿と教へらる 同
 梨狩りや大玉狙ふ肩車 同
 この人と決めた一日や秋桜 同
 黒々と田にうづくまる稲架の闇 同
 浮見堂ぐるり取巻く虫の声 大阪 木村宏一
 露草の儂さ滲む藍の色 同

秋灯や拡大文字の電子辞書 大阪 木村宏一
 乱れ萩しやがみて躲す山路かな 同
 名水の流れ頂く芋水車 同
連れ潮にエンジン軽き良夜かな 千葉 田村公平
 天空へ湯けむり昇る夜寒かな 同
 越屋根の繰糸場跡秋高し 同
 秋深き草津に米寿祝いかな 同
 案内を子供が務む敬老会 同
 蟋蟀や一番に鳴く厨口 三重 山口美琴
 桔梗咲く源氏の館古都の旅 同
 秋の蚊や耳元に來て何告げる 同

秋日傘サッカー少年声援す三重山口美琴
十五夜の窓辺に寄りて夫と居る同
樹の下に愛犬の墓秋うらら静岡渡邊春生
小鳥来る動物園の休園日同
足腰を鍛へ高きに登りけり同
包丁の鈍き光や朝寒し同
廃線の鉄路に紅く吾亦紅島根白根鈴音
草の香の零るるさきの露の玉同
草中にぬらりのらりと穴惑ひ同
白杖の歩み止めたる法師蝉大阪森戸しゆじ
鈴虫や遠夜の空に微かなり同

桔梗の雨に濡れ行く風情かな愛知石川順一
恐らくは夜業の人の帰りかな同
木犀の匂ひ香りて想ふ里山梨志村万香
寂しさを隠して踊る風の盆同
間引菜のさみどりからむ Pasta かな千葉筒井省司
木犀の香氣に行ったり来たりかな同
抜け道の此処もあそこも秋刀魚焼く愛知駒田暉風

寸感

ゆたか

高原を天へ繋げて蕎麦の花

恵山

稲の育たない高地でも育つ蕎麦。

高原の蕎麦畑の花の白が、豊作を約束されるように天に溶け込んでいる様子がそつなく詠まれている。

景が明るく捉えられている秀句。

照り翳る陣屋の白州桐一葉

そうびん

天下の秋を知るといふ桐一葉と陣屋の白州の照り翳るが響きあつて陣屋時代の人の動きまでが連想されます。

多くのことを言わずして多くを語っている秀句。

男郎花流るる風に逆らはず

幹夫

一茎の天辺に多くの花をつけていて少しの風に揺れる男郎花。

風の強弱に比例して揺れる男郎花と自身の日常と比較している作者が感じられます。

花の揺れている様子が心地よく伝わってくる秀句。

金木犀路地いつせいに匂ひ初む

よし子

木犀は、花を目にするよりも匂ひから嗅いだことを知ることの方が多い。

路地に面した個々の庭に植えられている木犀が見事に詠まれている。

臭覚で捉えられた秀句。

学ぶこと道のり遠き秋灯下

允孝

一定の目標を達しても作者は、より高きを求めることから学習には終りが無い。

学びの壁に幾たびも突き当たり、都度乗り越えてゆく作者が伺えます。俳句も未永く続けられますようお奨めします。

学びに対し秋灯がよく効いている秀句。

この石も先祖の一人秋彼岸

睦夫

吊上げも済み、もう仏壇に位牌がない、御先祖はどのような人だったかは分からないが、先祖のおかげで自身の今日がある。

彼岸の墓参りによせて先祖を敬う清らかな気持ち伝わってくる秀句。

互選一〇句の集計結果 互選者一〇人

高点句

四点 白杖の歩み止めたる法師蟬

森戸しゆじ

四点 露草の儂さ滲む藍の色

木村宏一

四点 照り翳る陣屋の白州桐一葉

石崎そうびん

四点 石狩に青き空あり鮭遡る

橋本幹夫

四点 高原を天へ繋げて蕎麦の花

清水恵山

四点 この石も先祖の一人秋彼岸

瀬尾睦夫

高点者

一〇点 石崎そうびん

九点 橋本幹夫

八点 池下よしこ

八点 木村宏一

互選一〇句 橋本幹夫選

名月を浮べて古都の舟遊び 木村宏一
白砂に寄する白波花カンナ 池下よし子
白杖の歩み止めたる法師蟬 森戸しゆじ
蟋蟀の鳴く草むらの荒野かな 石川順一
蠶螂の鎌を借りたき草の丈 白根鈴音
照り翳る陣屋の白洲桐一葉 石崎そうびん
秋天や一機離陸し夢を追ふ 山口美琴
雨戸閉め水割り二杯雨月かな 筒井省司
コスモスの咲いて門出や退職日 瀬尾睦夫
不忍の池にかりがね渡りくる 清水恵山

互選一〇句 清水恵山選

露草や儂さ滲む藍の色 木村宏一
嫋やかに雨の滴る葡萄棚 橋本幹夫
火口湖のかぎりなき蒼天高し 石崎そうびん
寂しさを隠して踊る風の盆 志村万香
白杖の歩み止めたる法師蟬 森戸しゆじ
鶏頭を添へて供花の調ひし 池下よし子
連れ潮にエンジン軽き良夜かな 田村公平
月光の撫でてゆくなり通夜の家 渡邊春生
廃線の鉄路に紅く吾亦紅 白根鈴音
学ぶこと道のり遠き秋灯下 後藤允孝

互選一〇句 池下よし子選

白杖の歩み止めたる法師蟬 森戸しゆじ
辛夷の実鳥にあげよか耳飾り 木村宏一
照り翳る陣屋の白洲桐一葉 石崎そうびん
石狩に青き空あり鮭遡る 橋本幹夫
秋の蚊や耳元に来て何告げる 山口美琴
恙なく万物実り厄日去る 清水恵山
月光の撫でてゆく通夜の家 渡邊春生
この石も先祖の一人秋彼岸 瀬尾睦夫
この先はけもの道なり男郎花 後藤允孝
蠶螂の鎌を借りたき草の丈 白根鈴音

互選一〇句 山口美琴選

白杖の歩み止めたる法師蟬 森戸しゆじ
露草の儂さ滲む藍の色 木村宏一
照り翳る陣屋の白洲桐一葉 石崎そうびん
石狩に青き空あり鮭遡る 橋本幹夫
潮風に鳥渡り来る船泊り 池下よし子
高原を天へ繋げて蕎麦の花 清水恵山
学ぶこと道のり遠き秋灯下 後藤允孝
寂しさを隠して踊る風の盆 志村万香
この石も先祖の一人秋彼岸 瀬尾睦夫
草の香の零るるさきの露の玉 白根鈴音

互選一〇句 木村宏一選

鈴虫や遠夜の空に微かなり 森戸しゆじ
十六夜の影踏み超して渡る橋 橋本幹夫
潮風に鳥渡り来る船泊り 池下よし子
露の玉草木に映す陽の光 山口美琴
高原を天へ繋げて蕎麦の花 清水恵山
秋簾巻けば瀬音の高まりぬ 石崎そうびん
越屋根の繰糸場跡秋高し 田村公平
学ぶこと道のり遠き秋灯下 後藤允孝
この石も先祖の一人秋彼岸 瀬尾睦夫
草の香の零るるさきの露の玉 白根鈴音

互選一〇句 森戸しゆじ選

露草の儂さ滲む藍の色 木村宏一
照り翳る陣屋の白洲桐一葉 石崎そうびん
石狩に青き空あり鮭遡る 橋本幹夫
寂しさを隠して踊る風の盆 志村万香
秋の蚊や耳元に来て何告げる 山口美琴
高原を天へ繋げて蕎麦の花 清水恵山
連れ潮にエンジン軽き良夜かな 田村公平
稲架かけて畝傍の里の夕間暮 後藤允孝
この石も先祖の一人秋彼岸 瀬尾睦夫
廃線の鉄路に紅く吾亦紅 白根鈴音

互選一〇句 後藤允孝選

鈴虫や遠夜の空に微かなり 森戸しゆじ
辛夷の実鳥にあげよか耳飾り 木村宏一
秋簾巻けば瀬音の高まりぬ 石崎そうびん
男郎花流るる風に逆らはす 橋本幹夫
木犀の匂ひ香りて思ふ里 志村万香
潮風に鳥渡り来る船泊り 池下よし子
秋桜風に頷くおもてなし 山口美琴
挨拶は目で交はしけり男郎花 清水恵山
木犀の香氣に行ったり来たりかな 筒井省司
越屋根の繰糸場跡秋高し 田村公平

互選一〇句 瀬尾睦夫選

恐らくは夜業の人の帰りかな 石川順一
十六夜や逢瀬早めて闇の間に 木村宏一
金木犀路地いっせいに匂ひ初む 池下よし子
秋の蚊や耳元に来て何告げる 山口美琴
高原を天へ繋げて蕎麦の花 清水恵山
引き潮にエンジン軽き良夜かな 田村公平
小鳥来る動物園の休園日 春生
指先の妖しきしぐさ風の盆 後藤允孝
十六夜の影踏み越して渡る橋 橋本幹夫
この道のどこまで続く鱗雲 そうびん

互選一〇句 筒井省司選

翳雲カーブミラーに収まらず 石崎そうびん
秋夕焼ひよいと乗せたる肩車 池下よしこ

露草や儂さ滲む藍の色 木村宏一

境界の赤き線引く曼珠沙華 山口美琴

蠅螂の鎌を借りたき草の丈 白根鈴音

不忍の池にかりがね渡りくる 清水恵山

天空へ湯けむり昇る夜寒かな 田村公平

裏戸出て姉さん被り秋刀魚焼く 駒田暉風

満天の星を肴に秋の宵 後藤充孝

石狩に青き空あり鮭遡る 橋本幹夫

互選一〇句 石川順一選

小鳥来る動物園の休園日 春生

クッキーの焼ける匂ひや秋の雷 池下よし子

抜け道の此処もあそこも秋刀魚焼く 駒田暉風

雨降るねうんよく降るね螢草 橋本幹夫

露草の踏みにじられて色残す そうびん

稲刈りにオーナー集ふ千枚田 後藤充孝

看病の少し寝てみる秋の風 万香

ちちろ鳴く石の底には団子虫 橋本幹夫

先導のトンボが止まるフェンスかな 田村公平

団栗の道に詩人を案内す 春生



インターネット俳句 清月
第170号
平成26年9月中の出句から

発行
平成26年10月20日

主宰 兼 編集
野田ゆたか

発行所
枚方市 大阪清月庵

清月俳句会のホームページ
[https://haiku575.info/seigetukai/
home/homu.htm](https://haiku575.info/seigetukai/home/homu.htm)